

## 47. 都市美運動家・石原憲治の都市美論に関する研究

Advocator of the movement for urban beauty Kenji ISHIHARA (1895-1984) and his thoughts and theories on urban beauty

中島 直人  
Naoto Nakajima

Kenji Ishihara (1895-1984), the fifth president of the City Planning Institute of Japan and the pioneering researcher on Japanese farmhouse architectures, was also the most important person in the movement for urban beauty, began in later 1920's by the newly established Society of Civic Art. Ishihara had always governed the management of the society as the standing director from 1925 to 1981. His thoughts and theories on urban beauty were not restricted to visual aspects. He thought urban beauty as physiological indicators related to living environments. In addition, he paid serious attention on historical characters of city and continued to insist of the close relation between urban beauty and urban planning.

*Keywords:* Kenji Ishihara, Society of Civic Art, Urban Beauty, Landschaft, Tokyo  
石原憲治、都市美協会、都市美、景観、東京

### 1. はじめに

2004年6月の景観法の制定を契機として、美しい景観の育成を目標に掲げた啓蒙啓発、そして実践運動が盛り上がりを見せている。こうした美しい景観の育成を目指す運動の先例としては、関東大震災後の東京にて設立された都市美協会が主唱した都市美運動が挙げられる。都市美運動は継続性（例：都市美協会は1926年設立、1981年解散）や規模（例：戦前期に全国都市美協議会を三回開催）といった運動の「形態」の点で、一見して際立つ存在である。では、都市美協会が主唱した都市美運動は、「思想」という点で、一体如何なる存在であったのだろうか。

都市美協会の活動については、文献1)が都市美委員会制度の提案を軸に1930年代前半までの活動実績を概観している。しかし都市美協会の前身である都市美研究会から、1960年代に社団法人化した都市美協会に至るまでの活動の全貌は捉えられていない。また、都市美協会の活動の背景にあった都市美思想の解明のためには、協会運営の中枢を担った都市美運動家個々人の都市美論の把握が不可欠である。この点に関しては、文献2)が都市美研究会創立者の一人である椽内吉胤の都市美論を整理している。しかし椽内が協会の運営に深く関与したのは1930年代前半頃までの一時期に限られており、椽内の都市美論から都市美協会の都市美思想の解明へと直ちに敷衍するのは適当ではない。

本稿では以上の既往研究に鑑みて、都市美協会が主唱した都市美運動の思想的側面についての一考察として、石原憲治（1895年生-1984年没）という人物に着目し、石原が都市美運動において果たした役割を明らかにした上で、石原の都市美論の体系的整理を行うことを目的とする。

石原憲治は、日本都市計画学会の第五代会長を務めた都市計画学者であるが、都市計画学に留まらない多彩な分野

で活躍した。文献3)は、民家建築研究家（民俗建築学会初代会長）、建築家（東京市建築技師・石原建築設計事務所主宰、新興建築家連盟主力メンバー）、基督者（基督教世界平和同盟、愛隣会）としての石原の活動を明らかにしている。また、石原の建築論に照準した論考も幾つか存在する<sup>4)5)</sup>。しかし、かつて「建築学者であり都市計画学者であり又熱心な都市美運動の立役者」<sup>6)</sup>と称された石原であったにも関わらず、これらの既往研究では石原の「都市美運動の立役者」としての側面は殆ど考察の対象とされていない。

本稿では第2章で都市美運動において石原が担っていた役割を、主に都市美協会機関誌『都市美』等の資料を用いて確認する。第3章では、石原が著した都市美に関する論考を収集・分析し、その都市美論の特徴を明らかにする。

### 2. 都市美運動における石原憲治の役割

#### (1) 石原憲治の略歴

石原憲治は1895年2月に兵庫県で生まれた。1919年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、大学院に進学し、農民建築研究を開始した。また、同時に、大阪市都市計画部の嘱託となり、都市計画実務、研究にも携わり始めた。

1922年に大学院を修了後、東京市に採用され、1941年に住宅営団に移るまで、復興都市計画事業や種々の都市施設的设计を担当した。また、日本新興建築家聯盟や都市美協会の活動にも力を注ぐ一方で、農民建築研究を継続し学位を取得し、1944年にはバンドン工科大学に赴任した。

終戦後、1949年に新設の東京都立大学建築学科の教授に就任し、1950年には日本民俗建築会を創立し、戦前からの農民建築研究の組織的な展開を図った。戦後は平和運動に力を注ぎ、1960年に都立大学退職後はセツルメント運動に献身した。1984年7月に享年89歳で逝去した。



### (Ⅲ) 日本都市美協会理事 (1945—1961)

終戦後、石原がバンドンから復員したのは1946年7月であった。戦時中は活動を停止していた都市美協会も、日本都市美協会という名称で復活した。1948年4月には、国会審議中の軽犯罪法に公共建造物への無許可貼紙禁止や公共緑地の無許可仮設建築・看板禁止などの条項を盛り込む修正願を衆議院議長宛てに提出したが、協会を代表して提出の手続きを行ったのは石原であった<sup>12)</sup>。また、翌1949年には運輸省が母体となり、官民合同の国土美化委員会が設立され、日本都市美協会からは石原が委員に選出された<sup>13)</sup>。

都市美協会は、1950年6月には石井柏亭が副会長に就き、事務局を東京都建設局公園観光課に置き東京都職員が幹事を務める体制を整え、「日本都市美協会」として正式に再発足した。石原は、従来通り理事を務めたが、同時に賛助会員として、協会に多額の寄付を行った<sup>14)</sup>。

日本都市美協会の活動は戦前期に比して活発なものではなかったが<sup>15)</sup>、石原自身は「日本都市美協会理事」の肩書きで、具体的な景観問題への意見を含む論考を継続的に発表した(表3)。1958年に日本都市美協会が提起した皇居のあり方については、広く議論を喚起したが、この時も都市美協会の主張は石原の論考を通して、広く公表された<sup>15)</sup>。

以上のように、戦後、再生された日本都市美協会において、石原はオピニオンリーダーとしての役割を担い、財政面も含めて、都市美運動の再生に貢献したのである。

### (Ⅳ) 社団法人都市美協会常務理事、副会長 (1961—1981)

1960年末になり、長らく不在であった会長に、住宅公団初代総裁で皇居開放論の主張者でもあった加納久朗を迎え、都市美協会は活動の再活性化へ向けて動き出した。1961年4月には40名の参加者を集めて「再発足への懇談会」が開催されたが、この会で進行役を務めたのは石原であった<sup>16)</sup>。

1961年10月には社団法人設立の認可が下り、新に都市センターに事務局を置いた社団法人都市美協会が発足した。石原は常務理事として運営を担った。1963年の会長・加納の急逝後は東京都民銀行頭取の工藤昭一郎が会長を引き継いだ。石原は常務理事として、また、後に副会長として、会長代理の役割を引き受けた<sup>17)</sup>。社団法人都市美協会は、首都美化モデル地区の検討、写真コンクール、清掃運動等の実施、首都美化要望書の提出などを行った。1965年には丸の内的美観論争(東京海上ビル計画)に対し、造園学会長、公園緑地協会会長と共に、都市美協会副会長として石原が意見書を提出した<sup>17)</sup>。しかし、この時期に、東京都からの委託事業に関して協会事務局側に不始末があり、都市美協会は活動の停滞を余儀なくされた<sup>18)</sup>。協会所在地は石原の建築設計事務所に移され、活動は休止状態となった<sup>19)</sup>。

1976年には長素連の発起で、休眠状態の都市美協会の再生のために、会員有志と青年会議所関係者間で懇談会が開催された。長から相談を先ず最初に受けたのは石原であったが、既に傘寿を迎えようとしていた石原は再生の検討において先頭に立つことはなかった<sup>10)</sup>。結局、社団法人都市美協会は再生を果せないうまま、1981年3月に解散した。

以上のように、石原は都市美協会の法人化に尽力した。後に休眠状態となった協会を引き取ったのも石原であった。

### (3) 都市美協会外での石原憲治の都市美運動

#### (Ⅰ) 美術批評家協会による啓蒙啓発運動

1936年10月に文化的な批評精神の高揚を目標に掲げて、東洋美術、西洋美術、工芸、写真、服飾、装幀などの各分野から一名の批評家を正会員とする美術批評家協会が設立された。この美術批評家協会に、「都市計画美術」分野の正会員に選ばれたのが石原憲治であった<sup>19)</sup>。

美術批評家協会は、1937年1月、報知新聞東京版に「大東京を美化しよう」を連載した(全12回)。連載初回では、1940年の東京オリンピック開催を念頭に、「都市計画美術(ユルバニズム)」という問題を極めて重視視し始めている<sup>20)</sup>と世界情勢を説き、「市民よ、先づ見直せ!」<sup>20)</sup>という狙いが説明された。連載に個人著名はないが、取り上げられたテーマには、「都市計画美術」分野からの唯一の会員である石原が他の論考で言及したものを多数含んでいた<sup>11)</sup>。

#### (Ⅱ) 東京都の都市美行政

戦後、都立大学教授に就任した石原は、学識経験者として東京都の広告物審議委員会(1949年設置)、教育委員会文化財専門委員(1952年設置)、首都美化審議会(1962年設置)といった都市美と関係のある委員会の委員に就任した。また、東京都が都市美委員会設置を具体的に検討するために開催した都市美対策準備会への参加(1949年2月)<sup>21)</sup>以降、都政研究懇談会有志としての皇居周辺の景観規制を求める意見書提出(1967年7月)<sup>22)</sup>に至るまで、東京都の都市美行政に様々な形で関与したのである。

#### (4) 都市美運動家としての石原憲治

以上のように、石原は1925年の都市美研究会の設立以降、1981年の社団法人都市美協会の解散まで、一貫して都市美協会の運営の中核を担った唯一の人物であった。そして、都市美協会外での活動が示しているように、都市美の権威としても認知されていた。つまり、石原は、都市美協会が主唱した都市美運動を代表する都市美運動家であった。

## 3. 石原憲治の都市美論

### (1) 石原の都市美に関する論考の内容構成

石原憲治は1920年代から1960年代までの40年以上にわたって、都市美に関する論考を継続的に発表した<sup>12)</sup>。論考の形式は都市美の理論的考察から啓蒙記事まで幅広い。しかし、表3で示したように、論述内容自体は、都市美を視覚的に捉える形態論、必ずしも視覚的には感知されえない多様な性質として扱う性能論、また、そうした都市美を実現するための制度や運動を扱った方法論、そして、都市美がもたらす効果や意義を説く意味論の何れかに分類される。また、論考の多くは、こうした理論的考察に加えて、具体的課題や問題に言及している。以下、変遷を追っていく。

### (2) 出発点としての芸術思想 (1920年代)

19世紀の英国にて、ジョン・ラスキンらの思想に基づき、ウィリアム・モリスらが発展させたアーツ・アンド・クラ

フツ運動は、我が国でも大正年間に積極的に紹介された。石原の初期の都市美論は、アーツ・アンド・クラフツ運動の周辺の芸術思想に大きな影響を受けている。石原は分化を特徴とする近代社会において、生活から切り離されてしまった芸術を、「必然の内に於ける調和の感覚」に見出される生活の総合美として取り戻すこと、を志向した<sup>23)</sup>。

例えば、1922a では、都市の美を「橋梁凱旋門記念碑等の装飾的附加物」といった個々の要素に見出す芸術観を否定し、都市を一つの「有機的の一体」として捉え、「総ての人間の技術と科学と活動と更に経済と都市の行政機関とを総合して総てを使役して一つの調和の中に統一と美とを創り出しそれに生命を与える」偉大な「社会芸術」を主張した。その際、「総合的計画に於いて初めて其の意義を完ふ」都市計画こそ、「社会芸術運動」であるべきだと考えた<sup>24)</sup>。

また、1922a では、大阪を対象に、こうした芸術観に基づいて、「都市の発生の一つの重要な要素」である河川や、「内からの要求によって自らの形態を備え」た工場群に具体的な「必然的美」を見出した<sup>24)</sup>。1924a では、「大東京復興計画案」として「都市の総合美」の描出を試みた<sup>25)</sup>。

都市美協会設立に時期を合わせて発表した 1926a では、先に触れたように、様々な分野の専門家、芸術家たちが「街頭へ」出て、総合美を追求するという社会芸術運動の構図が示されたが、同時に都市は「市民の共同の意志、精神」の表現であり、「市民の協力」が必要だと認識が付加された<sup>9)</sup>。また、市民の意志の表現としての都市という考えは、各時代の意志、精神の表現、即ち「時代の文化」への視線を生み、歴史的遺産の保存問題も論点となった<sup>26)</sup>。

以上のように、1920年代の石原の都市美論は、後の論点の萌芽を含みつつも、様々な分野の専門家が集う都市美研究会を意義付けるように、形態論としては総合美、方法論としては社会芸術という芸術思想の体裁を成していた。

### (3) 景観、環境概念の導入 (1930年代前半)

1930年代に入ると 1931b で、「風景 (Landschaft) 地理学」に言及し<sup>27)</sup>、1933c では、「地理的精神を都市計画乃至地域的計画の中に導き入れる事の急務を感ずる」とするなど、石原は 1920年代半ば以降、我国の地理学で急速に導入が進められていた「土地の上に於ける人類生活の決算」としての「景観」概念に大きな関心を抱くようになる<sup>28)</sup>。

1934年に開催された第四回全国都市問題会議は、都市美協会としては広く全国の都市計画関係者に都市美論を披露する初めての機会であった。石原は、この会議で都市美協회를代表して講演を行ったが、その講演記録である 1934c は、後の石原の都市美論に通観される内容を備えていた。

まず第一に、形態論について、「景観という言葉都市美の上に取り入れて解釈することが最も正当ではないか」とし、全面的に景観概念を導入した。自然景観と文化景観、更に文化景観を形態的骨格と機能的地域に分かつことで、都市美の構造を客観的に把握可能なものとした<sup>29)</sup>。

そして第二に、都市美の審美の基準を芸術論、ないしは形態論のみに委ねず、広く生活環境の性能の問題とした。

それは「生理学的概念」、即ち光線、色彩、騒音、安全感、疲労感といった点、また「心理的・社会的概念」、即ち歴史や流行といった点からの生活環境の点検を、美の判断の基準に置くということであった。そして、改めて「景観」を「生活環境の性格的表現」と定義したのである<sup>29)</sup>。

講演では、都市は「歴史的な労作の蓄積」であり、景観形成には時間を要するという歴史感覚、また、「観光資源」としての都市美という視点も提示された<sup>29)</sup>。更に、同会議用のアンケートへの回答では、都市美協会として提案する「都市美委員会」について、連絡統制機関としての有効性や美観統制機関への展開という将来性を論じた<sup>30)</sup>。

以上のように、1930年代前半には、芸術思想から脱皮した都市美論の枠組みや諸論点が形成されていったのである。

### (4) 方法論の展開 (1930年代後半から 1940年代前半)

1930年代後半以降、石原の都市美論は、都市美を「単に視覚に映ずる表面のみでなく、より立体的、より生活的に快適する環境を創造すること」<sup>31)</sup>と捉え、都市美の判断の基準としての「生理的概念」を一貫して強調していった。その結果、「住み心地よき健康な都市」といったキャッチフレーズが、都市美運動の目的を表すようになり、意味論において、都市美は「その根本に於て都市計画の精神に一致すべき」<sup>31)</sup>であると、都市計画に最接近したのである。

また、生活者の感覚に根ざした「生理的概念」の強調は、市民一人一人の「公共社会生活に対する道徳」<sup>31)</sup>に訴えて環境改善を図る「公德運動」<sup>32)</sup>論とも関係付けられていた。

一方で、無数の人々の労作の蓄積という景観の歴史感覚は、1939b で、更に蓄積には「一つの方向」、つまり「その時々思い付いた事でなくて、常に都市の美観について一定の企画」が必要だという認識に展開した。そしてこの認識は、都市計画の一部門としての「美観計画」、更に「美観計画」を立案し、審査にあたる「常設委員会」の設置といった方法論の検討と繋がったのである<sup>33)</sup>。

このように 1930年代後半には、形態論、性能論との連関の中で、市民の公德運動と美観審議会という方法論上の二つの主要な論点が明確に打ち出されたのである。

### (5) 歴史・文化の尊重 (1940年代後半以降)

戦後の石原の都市美に関する論考は、戦前期に出揃った形態論、性能論、方法論、意味論を総合した点と、都市美の観点から具体的問題提起を数多く行った点に特徴がある。

「国敗れて山河あり」から始まる 1949a は、戦後初の総合的な都市美論であった。しかし、「我国の復興都市は果して如何なる性格を表現しようとしているのだろうか。文化国家として適しい文化都市の建設が考えられておるのだろうか」と問いかね、「文化財を大切にすることこそ文化都市の責任ではあるまいか」と訴えるなど、歴史・文化をより強調していた<sup>34)</sup>。石原の都市美論の中で、最も体系的に整理された体裁の 1956a でも、「都市の歴史的な性格」に多くの紙幅を割き、その認識の重要性を説いたのである<sup>35)</sup>。

こうした傾向は、戦災復興事業の進展と並行して生じた不忍池埋立て・野球場建設計画、外濠埋立事業、御茶ノ水

表3 石原憲治の都市美に関する論考の内容の変遷

※論考内のキーワードを抽出し、関係を図示した。点線の枠内は各時期の特徴的な傾向を示す。

年	収録誌名	論考タイトル	理論			実践	
			意味	性能	形態	方法	具体的課題・話題※筆者の要約
1922a	中央美術 8巻7号	都市計画家として 観たる大阪	住み心地よき都市／なつかしき都市／美しい都市	生活芸術	総合・調和 ●立体美●水上美●工場美	社会芸術運動	●外部部の自然美保存 ●鴨川等の水上美保全 ●防塵防止
1924a	現代都市之 計画	理想的帝都の設計	用と美の一致	都市の総合美	統一ある設計	都市計画	●都市計画(代議士による)の必要、市民生活の必要、交通系統、中心地、地域制定、(都市計画)
1926a	東京朝日 新聞 10月24 日・27日	東京の都市美 (上)・(下)	市民の共同の 意志、精神	総合美	●道路美●自然美 ●構造美●意匠美	都市計画	●市内の一部埋立て (歴史的価値と都市生活上の必要との関係) ●復興建築 ●地蔵、お茶の店、水邊、丸屋、半蔵門そ の他内外露の景色、不忍池、小笠原、弁天橋 などの自然美保存
1931a	都市美：2号	忘れられた風景	●現代風俗史 ●人情の風景	●道路風景 ●風景地理学	●地形の風景	都市構築学	●山手の丘陵地と谷町風景の持続
1931b	工政：137号	都市風景と道路に就て					
1933a	都市美：4号	歩道の感想					●ゾラヌスの建築論
1933b	都市美：5号	歩道の感想					●建築規制(新・旧案) ●都市美への影響
1933c	建築と社会 16巻9号	都市計画より土地計画 まで					
1933d	都市美：6号	歩道雑意					
1934a	都市美：7号	舗道の感想					●鉄道沿線・農村風景維持 ●ピタ規制 ●サービス改善 ●市庁舎位置
1934b	都市美：8号	舗道の感想					●市庁舎位置 ●サービス改善
1934c	第四回全 国都市問 題会議議 究報告：7	文化景観としての 都市美	観光資源	生活環境	景観	都市美委員会	1934b 第四回全 国都市問 題会議議 究報告 3
1935a	都市美：12号	帝都の都市建築美					●内閣風景特務 ●中野建築博覧会(銀座) ●全庁官舎、北の丸、日本橋東横橋 ●皇居川工場地帯風景改善
1935b	都市美：13号	建築祭を終わりに	環境の改善・整美	性格的表現	都市美構成	社会共同の整備	●公共的都市生活 に対する意識
1936a	市政研究：2巻4号 13巻11号	東京市の技術的考察 昭和十五年と都市美	住み心地よき健康な都市	主理的都市美	都市計画の施設	都市美運動	●市民公徳運動 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1937a	商店界：17巻6号	都市美と商店街	住み心地よき健康な都市	主理的都市美	都市計画の施設	都市美運動	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1937b	都市美：19号	文化生活としての都市美	文化の環境	再認識	都市計画		●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1937c	現代の都市美	屋外広告物の取締に就て	生活の秩序を導いてくる調和				●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1937d	風景：4巻11号	東京風景雑記	地域の環境	性格的表現	景観		●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1938a	健康都市の建設	生理的都市美	生理的快楽	生理的快楽	生理的快楽	市民の啓蒙的運動	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1939a	都市美：27号	二、三の問題	健康な都市 愉快に生活できる都市	生理的快楽	生理的快楽	市民の啓蒙的運動	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1939b	大 阪 15巻9号	美観の企画性と 風景の性格	全環境	性格表現	風景の性格美	美観委員会	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1941a	都市美：37号	生活環境の創造	生活感情	人間の感情	人間の感情	生活環境創造運動	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1945	特 載						
1948a	観光：18号	森の都市を造らう	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1948b	希望：19号	終戦後の都市美に就て	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1949a	観光：28号	都市美の理想	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1949b	東京新聞 8月17・18日	都市と風貌 井原公園と不忍池	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1950a	都市美：2号	都市美のために	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1950b	都市美：4号	都市美審議会について	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1951a	新聞と広告 16巻4号	屋外広告論	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1952a	朝日新聞 11月16日	高速道路と都市美	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1953a	観光事業研究会 論文集：1集	都市の美観について	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1953b	新都市：7巻9号	公園緑地の危機	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1956a	第18回全 国都市問 題会議文 献：2	都市美と都市計画	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1957a	朝日新聞 11月2日	都市美と広告取締り	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1959a	朝日新聞 3月12日	一部を記念公園に 皇 居のあり方について	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1959b	都市問題 50巻12号	皇居開放と都心開発問題	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1961a	町と生活 16巻12号	都市美・都市職あれこれ	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1963a	都市美会報 13・4号	オリンピックと都市美 行政	健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明
1964	東京オリンピック		健康な住み心地よき都市	文化都市	文化都市	公共社会の 道徳の回復	●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明 ●防塵・看板・照明

溪谷の広告設置、銀座高架高速道路建設等の、都市美の観点から再考を促すべき具体的な問題と結び付いていた(表3)。戦災復興期以降も皇居開放問題、丸の内的美観論争での皇居前広場の景観保全問題に積極的に取り組んだ。つまり、都市美協会、ないしは石原個人として、戦後、力を注いだのは、「都市の歴史的な性格」を成す骨格的な公共用地の侵犯に対する抗議であった。そして、解決策として、戦前からの持論である美観審議会の設置とともに、戦後の民主化の時流を背景として、問題の遺伝子を都市計画が一般市民の声を少しも反映していない<sup>36)</sup>制度であること、一方で「都市民は都市計画が自分らの事業であり、自分らのコミュニティの計画であるという自覚を持っておらぬ」<sup>36)</sup>ことに求め、都市計画制度の民主化や市民への都市計画教育といった論点をも都市美論において言及したのである。

#### (6) 石原の都市美論の特徴

芸術思想に端を発した石原の都市美論は、地理学から景観概念を導入し、枠組みを構成した。その後、生理学的概念の追求、公德運動や都市美委員会の設置、歴史・文化の強調といった時期毎の特徴を見せつつも、論旨は安定していた。その要諦は、都市美を視覚的な美に限定せず、生活環境の改善問題として幅広く捉える広義性、また、都市美を過去の労作の蓄積として捉える歴史性にあった。そして、総合美、企画性、「住み心地良き健康な都市」といった理論的次元、更には公共用地の侵犯という具体的問題を通して、都市美と都市計画との密接な関係を主張し続けたのである。

#### 4. おわりに

本稿では、石原が確かに「都市美運動の立役者」であり、都市美の広義性、歴史性を主張し、都市計画との接近を旨とする都市美論を展開していたことを明らかにした。

こうした石原の都市美論に代表される都市美運動の思想は、我国の都市計画において必ずしも自明ではなかった生活環境として都市を捉える視点を「住み心地良き健康な都市」という標語の下で明確に打ち出したこと、また、都市の歴史や文化という我国の近代都市計画が対象外とした観点を、常に都市計画の課題として主張し続けたこと、において歴史的意義を有していた。そして、2005年6月の景観法の全面施行によって、都市計画と都市美の接近が実現しようとしている現在、こうした都市美運動の思想の吟味は、われわれ自身が担うべき次代の景観運動の意義を深く突き詰めていく際の、基本的な視座を提供している。

#### 補注

- (1) 都市美協会の役員構成については、機関誌『都市美』に掲載の役員表、及び文獻8)から知ることが可能であるが、正式な就任、辞任の年月は確認できない。
- (2) 2年以上常務理事を務めたことが確認できるのは、小野二郎、堀江一、山本亨(以上、東京市吏員)、平野眞三(東京市政調査会、1936年12月発行の『都市美』18号以降、石原とともに『都市美』の編集担当)、福原三(資生堂、常務理事に引き続いて副会長に就任)の5名であるが、何れも5年ご満了扱い。
- (3) 機関誌『都市美』には、1934年9月17日に銀座日本屋で開催された会議以降、1941年6月10日に東京市土木局で開催された会議まで、合計31回の編集会議開催の記録が掲載されているが、石原が出席したのは計2回である。また、戦前時代の機関誌『都市美』全38冊(1~39号、15号は次号)のうち、アンケートへの回答形式の原稿も含めて、半分の19冊に石原の論考が掲載されている。
- (4) 機関誌『都市美』には、合計22回の都市美協会主催の懇談会の記録が掲載されて

- ているが、石原はその全てに出席している。
- (5) 日本都市美協会機関誌『都市美』1~5号に掲載された記録によると、寄付金額は石原憲台(1万1千円)、資生堂社長松本昇(1万円)、サン写真新聞社社長石川一(1万円)、葛原工業KK専務取締役竹内英恵(1万円)、東京電灯株式会社(5千円)、島田藤(1千円)、小林隆徳(1千円)、山端半玉(1千円)、石井柏亭(1千円)である。
  - (6) 文獻14)は、「常設的会合は毎月おこなわれた。これは各方面の文化人(会員)による都市美論の「ついで」といったような、一種のサロン芸術論の域を出ないものであったが、命脈が切れた。井下清氏や石原憲台氏等によって戦中戦後を通じて辛くもたもたれていった」としている。なお、著者の「関」は日本都市美協会の発足時(1950年)、東京都建設局の職員として初代幹事を務めた前島康彦である。
  - (7) 例えば1964年4月1日開催の「東京における緑地帯に対する協議会」に、石原は「都市美協会会長代理」として出席している(1964、都市計画:45号、p.59)。
  - (8) 前島康彦は、「再生都市美協会は、三、四年足らずして暮れをじた。それは熱心な幹事会長の急逝という事もあったが、事務局をあげかけていたある男の不始末によって、東京都よりの受託事業に大失敗したためであった。」(文獻18)、pp.304-305)としている。東京都各種団体連合会が1965年4月に発行した『主要各種団体名鑑』には「都市美協会」が掲載されているが、同会が内容を拡充して1966年6月に発行した『全国各種団体名鑑』には掲載されていない。
  - (9) 石原憲台常務理事奥田敬朝へ送った書簡(1967年12月22日、東京大学都市工学部奥田敬朝文庫)の送出人に「石原建築設計事務所内 都市美協会 石原憲台」とある。また、1973年11月29日開催の第71回国会決算委員会で、奥田敬朝となっている建設省所管の公益法人の一つとして都市美協会が名指しされている。
  - (10) 1976年8月24日付の長から奥田敬朝への書簡(上記奥田文庫所蔵)には、「石原憲台先生のお宅を訪ねますと、この覚醒、再生については、休職中いろいろお骨折りになった奥田さんと横山さんのお考えが大事であるから、お二人のご意見をたずねることが必要だとおっしゃいました」とある。なお、奥田文庫中の長氏書簡からは、少なくとも1976年9月29日、11月24日の二回、懇談会が開催されたことが確認できるが、石原は何れも出席していない。
  - (11) 連続各回のテーマは、部露光景、坂道上の障子、街頭の伝染病患者、御路筋、周囲と調和した公共建築物、家屋の裏・背後、背陰、濠の風致と公共建築物、塵・痰・貼紙、看板、複雑な交差点、地下鉄出入口である。なお、この連続は、部落差別糾弾の対象となった(1994、木下地区のあゆみ、明日を拓く:2・3)。
  - (12) 本稿では、石原が都市美に対する自分自身の考えを述べたまとめた文章(アンケート回答等 其餘)を「都市美に関する論考」として収集作業を行った(表3)。

#### 参考・引用文献

- 1) 中島直人・西村幸夫(2002)、「1930年代前半における都市美協会による『都市美委員会』設置の経緯に関する研究」、日本建築学会計画理論文集:557, pp.241-248
- 2) 中島直人・西村幸夫・北沢猛(2001)、「都市美運動家・椽内吉龍に関する研究」、都市計画論文集:36, pp.229-234
- 3) 石田順房・昌子住江(1995)、「石原憲台論」稿——建築家・都市計画家・基督者石原憲台について、総合都市研究:55, pp.113-148
- 4) 矢作英雄(1981)、「石原憲台の必然の建築について」、日本建築学会東北支部研究発表会梗概集, pp.79-82
- 5) 矢代真己(2000)、「石原憲台 全生を回復する回路をつなぐ『社会技術』という視座」、建築文化:55(639), pp.136-137
- 6) (1959)、「スラム化した上野公園をどう考えるか?」、都市公園:22, pp.33-40
- 7) (1925)、「御案内(都市美研究会第二回例会、大正十四年十二月十三日付付)」、東京都公文書館所蔵
- 8) (1935)、「都市美協会概要」、都市美協会
- 9) 石原憲台(1926a)、「東京の都市美(下)」、東京朝日新聞:12月27日
- 10) (1929)、「東京朝日新聞、11月29日、東京朝日新聞社」
- 11) 石原憲台(1930)、「復興街に美観地区の指定」、都市公論13(6), p.82
- 12) (1948)、「朝日新聞:4月16日」
- 13) (1949)、「国土美化委員会」、観光:28, p.39
- 14) 関(1961)、「意がなる都市美への道—社団法人都市美協会の発足に際して—」、都市公園:29, p.14
- 15) 石原憲台(1959b)、「皇居開放と都心開発問題」、都市問題:50(12), pp.49-60
- 16) (1961)、「都市美協会、新発足への懇談会記録」、緑と水の市民カレッジ・東京グリーンアナーカイウス所蔵
- 17) (1967)、「美観地区問題に関する要望書」、造園雑誌30(3), p.31
- 18) 前島康彦(1974)、「井下清先生業績録」、井下清先生記念事業委員会
- 19) 外山山三郎(1978)、「美術批評家協会結成の頃」、絵:178, pp.18-21
- 20) (1937)、「大東京を美化しよう1」、報知新聞東京版:1月12日
- 21) 東京都都民室首都建設部(1954)、「首都建設問題の経緯概要(第3集)」
- 22) (1968)、「丸の内地区建築規制問題と都市景観」、建築雑誌83(996), pp.2-10
- 23) 石原憲台(1924)、「全体の回復:文明に贈る」、厚生閣
- 24) 石原憲台(1922a)、「都市計画家としての観た大阪」、中央美術:8(7), pp.24-32
- 25) 石原憲台(1924a)、「現代都市の計画」、洪洋社
- 26) 石原憲台(1926a)、「東京の都市美(上)」、東京朝日新聞:12月24日
- 27) 石原憲台(1931b)、「都市風景と道路設計」、工政:134, pp.13-14
- 28) 石原憲台(1933c)、「都市計画より土地計画まで」、建築と社会:16(9), pp.1-5
- 29) 石原憲台(1934c)、「文化景観としての都市美」、第四回全国都市問題会議研究報告:7, pp.253-262
- 30) (1934)、「都市の美観」、第四回全国都市問題会議研究報告:3, pp.97-118
- 31) 石原憲台(1935b)、「建築祭を終りて」、都市美:13, p.17
- 32) 石原憲台(1936a)、「東京市の技術的考察」、市政研究:2(4), pp.83-93
- 33) 石原憲台(1939b)、「美観の企画性と風景の性格」、大阪:15(9), pp.22-24
- 34) 石原憲台(1949a)、「都市美の理想」、観光:28, pp.2-6
- 35) 石原憲台(1956a)、「都市美と都市計画」、第18回全国都市問題会議文獻:2, pp.134-162
- 36) 石原憲台(1950a)、「都市美のために」、都市美:2, pp.3-4